

# 保健師 最前線

## まずは事実を 知ることです

向日市

しばた あきこ  
柴田 晶子さん



「一人でも多く、向日市の人たちの健康や予防のお役に立ちたいんです」。保健師としての役割や抱負を、最初から熱く語りかけてくれた。

「まずは特定健診の受診率（43.9%、府内自治体で5番目）を上げることが課題なんです」。向日市では、健診を受けていない未受診者の生活習慣病にかかる医療費は、健診を受けた人の4倍もかかっているという。「せっかく受診してもらったんですから、支援が必要な人たちへの特定保健指導の実施率（26.9%、同じく4番目）こそ、もっとアップさせることが私たちの役割なんです」。特定保健指導の対象者に対し、通知だけでは限界があると話し、昨年からは訪問や個別相談に本格的に乗り出した。

保健師になって25年、このうち約20年は母子保健に携わった。2年前、健康推進課の係長に就任し成人保健グループのリーダーを務める。「私自身、成人保健の経験が少ないこともあり、スタッフ全員で向日市の実態・事実を知ることから始め、情報を共有し、そこから課題を見つけ、自分たちの仕事で何ができるのか模索しました」と話す。

その時に役立ったのが国保データベース（KDB）

システムだと指摘する。システムの活用で、メタボ（内臓脂肪症候群）だけでなく保健指導の新たな対象が浮き彫りになってきたという。「心筋梗塞や脳卒中、糖尿病が多いことがデータで裏付けられたんです。いずれも生活習慣病です。病気になる前、重症になる前に、いかに予防するかが大事なんです」。柴田さんの口からデータの数字と、「事実を知る」という言葉がポンポンと飛び出す。

「母子保健で学んだことの一つは、どういう生活リズムが子どもの成長にいいかということです。食事や睡眠は生活習慣の基本でしょう。ということは、生活習慣病の予防はお母さんの妊娠中から始まっているといってもいいのではないのでしょうか」

全国の保健師らでつくる自主的な研究会の世話人も務め、二人の子どもたちと接する時間が少なかったと打ち明ける。「ところが高校三年の長女が『お母さんの仕事がおもしろそうなので保健師になる』と言い出したんです。素直にうれしかったです」。柴田さんの顔に笑みがこぼれた。

「親子で保健師さん」の誕生、楽しみにしています。

